

那須に立ち昇る湯気と霧雲

宇敷 辰男

東京から東北自動車道を走り、二〜三時間で栃木県那須に着く。那須連山は那須岳とも呼ばれ、五つの火山が連なっており、麓に広大な那須高原が広がっている。

那須ロープウェイで、主峰の茶臼岳（一九一五[㌢]）の九合目まで昇ると、青空に白い雲がゆっくり流れていた。火山から噴出した礫岩^{れきがん}をザックザック踏み締めながら、真っ直ぐ山頂に向って登ってゆくと、蝶々が群れて舞う山に、霧雲が這い上がってきた。

茶臼岳の火口を巡ってゆくと、硫黄の臭いが風に乗り、黄色くなった噴き出し口から湯気が立ち昇っていた。山頂に着き那須岳神社に手を合わせた。山を下り硫黄の欠片を拾いながら、音を立てて昇る噴煙に近づく、白煙がゴーゴー勢いよく噴き出していた。麓の分れ道に着くと、臭う湯けむりが霧になって広がり、岩ツバメが低く飛んでいた。この先の南月山^{みなみがっさん}（二七七六[㌢]）を越えて行くと沼原湿原^{ぬまっぱしづげん}がある。

むかし歩いた沼原湿原は、木道の下に清らかな水が流れ、霧のなかコツコツ足音を響かせてゆくと、右に左にニッコウキスゲや紫のアヤメが咲いていた。雨上がりの湿原は次第に霧が濃くなり二〇[㌢]先は見えなくなった。三[㌢]先の白い霧の中に、黄色いラッパ形のキスゲが語り掛けるようにこちらを向いていた。

山越えの湿原は遠いので、茶臼岳の麓を一周し、那須ロープウェイへ戻った。山麓駅から二〜三km下って谷間を降りた所に大丸温泉^{おおまるおんせん}がある。明治以降に開拓地となり発展した那須高原。標高千三百[㌢]の一軒宿には乃木希典夫妻が毎年湯治に訪れていたという。

七八・六度の源泉から湧き出す湯が、川になって流れ、そのまま露天風呂になっている。内湯を出て木の葉が浮かぶ透明な露天の湯に身体を沈めた。湯の底は砂利で、歩くと足裏のツボが刺激され気持ちが良い。太陽の光が澄んだ湯の中の岩と砂利を照らしていた。

笹が茂る山腹の斜面を見上げると、露天から昇った湯気が、白い雲になり、那須岳に向って流れているようだった。